

II 北加賀出土の布留系土器について

—— 北安江遺跡出土の布留系甕の分析から ——

(1) はじめに

北安江遺跡から甕を主体とした多量の布留系土器が出土した。しかし、前述したように大半がC16溝・C17溝という溝状遺構からの出土で、特にC16溝上層においては月影式土器との混在が著しく、層位的にその区別と関連性を明確に把握することができなかった。溝状遺構という開口遺構にあっては、出土遺物はある程度の時間幅をもって投棄された可能性は強い。ただその時間幅は、明瞭な中間層をおかない場合は、一定期間内での連續的な行為によるものと考えられる。C16溝・C17溝での土器の堆積を、こうした一定時間幅での連續的な堆積と理解することを前提として、月影式土器から布留系土器への転換がいか様であったのかを概観してみたい。なお、その方法として、布留系甕の形式分類をこころみ、それを軸にして北加賀地域の他遺跡での出土状況をふまえ、転換期の段階設定をすることとする。

(2) 北安江遺跡出土の布留系甕の形式分類

形式分類は、全体形を残すものがほとんどないため、口縁形態によった。口縁端部の肥厚度によりI・II・IIIに大別し、さらに端部形態によりそれをA～Dの4形態に細別し、その組合せにより8形式に分類した。その規準は次のとおりである。

I 一口縁端部の肥厚がほとんどなく、ほぼ直線的あるいはやや内湾ぎみに外反する。

II 一口縁端部の肥厚がわずかにみとめられ、内湾ぎみに外反する。

III 一口縁端部の肥厚が明瞭で、内湾して外反する。

A 一口縁端部が平面あるいはわずかに丸みをもち、外傾する。

B 一口縁端部が丸い（内面がわずかに凹み端部が丸くハネ上げ状になるものも含む）。

C 一口縁端部が平面あるいはやや凹み、ほぼ水平かやや内傾する。

D 一口縁端部が内傾する。

	A	B	C	D
I				
II				
III				

第73図 北安江遺跡出土布留系甕口縁部形態分類図

甕 I A C16溝上下層から各1点出土している。口縁部のヨコナデは極めて入念で、器面は平滑である。体部は長胴となると思われ、肩は張りの少ないなで肩である。体部外面は中位近くまでヨコハケを施した後、肩部はヨコナデされる。内面のヘラ削りは頸部まで達していない。胎土は微砂粒を含むが、この手の甕では最も精良。C16溝分類では甕C Vとしたもの。

甕 I B C16溝下層から1点、上層から2点、C17溝から1点出土している。口縁部のヨコナ

テは入念で、器壁は薄い。体部は甕 I A と同じくなく肩。体部外面はタテハケ後中位までヨコハケ調整される。ハケ状具は極めて単位の細いものが使用され、調整は丁寧。内面のヘラ削りは甕 I A と同様に肩部までにとどめ、それより上はヨコナデ調整される。C16溝分類では甕 C IX としたもの。

甕 II A C16溝上層から7点、C17溝から5点、C6溝から1点出土している。口縁部の屈曲が強く、体部は球胴をなすものと思われる。口縁部のヨコナデは上部と頸部の2段にわたって強く入念に施されるため、頸部上位に弱い稜を作るものも多い。

体部外面の調整はタテハケ後に肩部までヨコハケ調整される。その後さらに肩部がヨコナデされるものもみとめられる。内面のヘラ削りは肩部までで、肩部には指頭圧痕を残すものが多い。胎土にはやや砂粒が目立つ。C16溝分類では甕 C VI としたものである。

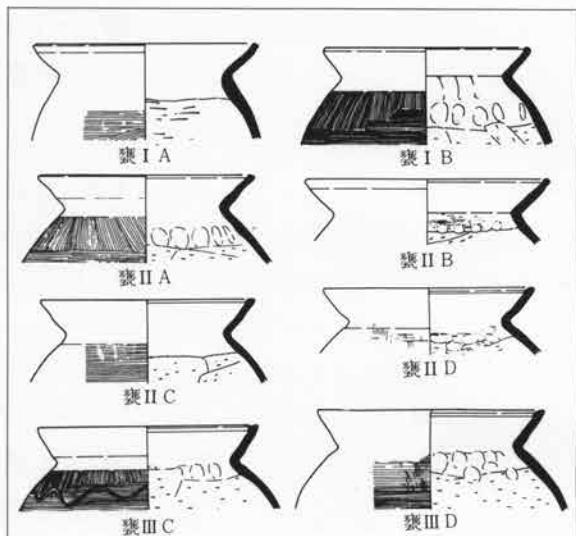
甕 II B C16溝上層から10点が出土、甕 C IX としたもの。口縁部が比較的長く、頸部での屈曲が強く体部は球胴をなすものと思われる。口縁部のヨコナデは入念で体部肩までヨコナデされているものが多い。内面は頸部近くまでヘラ削りされる。胎土は比較的良好で明るく発色するものが多い。

甕 II C C16溝上層から8点、C17溝から3点が出土。C16溝分類では甕 C VII に包括される。頸部の屈曲が強く体部は球胴をなすものと思われる。口縁部のヨコナデは入念で、甕 II B と同じく体部肩までヨコナデされるものが多い。内面は頸部近くまでヘラ削りされるが、一部指頭圧痕を残すものもみられる。胎土は粗砂粒を比較的多く含む。

甕 II D C16溝上層から7点、C17溝から3点が出土。C16溝分類で甕 C VII としたもの。頸部での屈曲が強く体部は球胴をなすものと思われる。タテハケ後体部上半部をヨコハケ調整するものが多いが、ヨコハケがさほど顕著でないものもみとめられる。タテ・ヨコともハケ目は細く、調整は丁寧である。内面のヘラ削りは肩部までで、肩部には指頭圧痕を顕著に残す。

甕 III C C16溝上層から24点、C17溝から6点が出土。C16溝分類で甕 C VII として甕 II C・甕 III Dとともに包括したものである。上方から強くナデあげられるため口縁端部がやや凹み内側に突出肥厚する特徴をもつ。口縁部は入念にヨコナデされるが、体部外面がヨコナデされるものはない。体部はタテハケ後、上半部はヨコハケ調整される。肩部に乱雑なクシ描き波状文が施される例も多い。内面のヘラ削りは頸部までのものは少なく、肩部に指頭圧痕を残す。

甕 III D C16溝から約90点、C17溝を主体としたその他の遺構から約30点と、布留系甕全出土量の約75%を占める。口縁端部の幅・内傾度・肥厚度などなお細分すべき個体差が存在する。しかし長く平面的に内傾肥厚するものは少ない。体部上半部はタテハケ後ヨコハケ調整されているが、頸部まで入念にヨコハケが施されるものやタテハケの痕跡を残すものもみられる。内面のヘラ削



第74図 布留系甕各種

りは、頸部までのものが多いが、肩部に指頭圧痕を残すものも相当量含まれ、画一的ではない。

なおこの分類を、布留式土器の安達・木下分類⁽¹⁾に対応させるならば、甕 I B・甕 II B——甕 Aa、甕 II C・甕 III C——甕 Ab、甕 III D——甕 Ac、甕 II D——甕 Bにそれぞれ対応するものと思われる。初期の布留式甕の特徴として、口縁部が丸く内肥し、その肥厚はわずかであり、口縁部の器壁が薄いことがあげられている⁽²⁾。口縁端部の肥厚がほとんどない甕 I A・甕 I Bは畿内でいう布留傾向甕⁽³⁾に近い特徴をもつ。こうしたことから、本遺跡の布留系甕を単純に口縁形態からその変化をみると、甕 I A→甕 II A、甕 I B→甕 II B、甕 II C→甕 III C・甕 III Dと移行したと考えられる。また、本遺跡でみるかぎり、第73図で系列化したとおり、A・B形態ではIII形態にゆくものではなく、C・D形態ではI形態にゆくものはない。したがって、I→II→IIIが時間的な移行を示し、A～Dは個別形態差を示すものと思われる。次に畿内での布留式甕の規準資料とされている各遺跡出土土器といかなる対応関係を示すかみてみたい。

(3) 猥内布留式土器との対応関係

まず、大和では、安達・木下編年⁽⁴⁾と纏向編年⁽⁵⁾、藤井編年⁽⁶⁾などがある。安達・木下編年では、坂田寺下層→上ノ井手遺跡 SD031、藤原宮 SD912・SD914→上ノ井手遺跡井戸下層→同上層と細分されている。坂田寺下層では甕 II B、同時期におかれる平城宮下層溝 SD6030⁽⁷⁾でも甕 II Bが出土している。上ノ井手遺跡SD031では甕 II B・甕 II Cを主体に甕 II D・甕 III Dが出土、藤原宮 SD912・SD914でもほぼ同様であり、上ノ井手遺跡井戸下層では甕 III C・甕 III Dが出土甕の主体となっており、本遺跡の形式移行とほぼ同じ傾向を示す。纏向遺跡⁽⁸⁾では、東田地区南溝（北部）中層から甕 II Dが、東田地区南溝（南部）中層から甕 I Bが、東田地区南溝（南部）上層から、甕 II B・甕 II C・甕 II Dが、東田地区土塙から甕 II Aが、辻地区土塙4下層から甕 I A・甕 I B・甕 II A・甕 II B・甕 II C・甕 III Cが、石塙周溝（西側）下層から甕 II Dが、辻地区土塙4上層から甕 II A・甕 II B・甕 II Cが出土している。編年的には、纏向2式に甕 I Bが、纏向3式（古）に甕 II B・甕 II C・甕 II Dが、纏向3式（新）に甕 I A・甕 I B・甕 II A・甕 II B・甕 II C・甕 II D・甕 III Cが、纏向4式に甕 II A・甕 II B・甕 II Cが伴うこととなる。纏向遺跡では庄内式古段階で布留傾向甕が出現し、庄内新式におかれる3式期には個別形態差の目立つ布留式甕が相当量伴なうと考えてよいようである。また、3式（新）と4式は、小型精製土器の伴出の有無を除けば、甕ではほとんど区別がつかないこととなる。こうしたあり方は奈良県院上遺跡⁽⁹⁾でもみとめられる。

発志院遺跡⁽¹⁰⁾では、布留I式と編年される神築田溝SD50下層より、甕 II B・甕 III C・甕 III Dが、方形落込遺構SK15中層より甕 II C・甕 II Dが、布留II式（古）とされる神築田溝SD50中層より甕 II A・甕 II B・甕 III C・甕 III Dが、布留II式（新）とされる神築田溝SD50上層より甕 II D・甕 III Dが出土している。布留I式とする神築田SD50下層には型式的に新しいと思われる甕 III C・甕 III Dが含まれ、また体部調整が雑なものがみとめられるなど、布留式甕にあっても、新しい傾向が窺え、安達・木下編年の上ノ井遺跡井戸下層式に近いものと考える。

河内では、西岩田遺跡⁽¹¹⁾ Bトレント河川Iが庄内式（新）から布留式（古段階）の土器を多量

に出土し注目される。布留型甕は甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅡDが出土している。甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡAが主体をなし、甕ⅡBや甕ⅡDは少ない。口縁部が二段に屈曲する小型鉢や小型丸底壺の小型精製土器を伴う。吉備系甕や山陰系甕（秋里Ⅰ、青木V・VI）の出土も顕著である。調査者は、「V様式系+庄内式+布留式」の共存関係を示すもの（古相）と纏向辻土塙4上層や坂田寺下層と併行するもの（新相）と2分して位置づけ、古相も布留式としている。¹²⁾これらの段階にあっては、庄内系甕が相当量残存することが、馬場川遺跡T地点¹³⁾菅振遺跡¹⁴⁾八尾南遺跡¹⁵⁾などで確認されており河内ではこうした段階から布留式とする見解が有力となっている。八尾南遺跡の米田編年¹⁶⁾では、纏向3式（新）併行におくSK10出土甕に甕ⅡBがみとめられ、坂田寺下層併行期におくSE9より甕ⅡB、甕ⅡDが、SE4より甕ⅡAが、SK74より甕ⅡA、甕ⅡCが出土している。また、定型化した布留式土器の標式とされる小若江北遺跡¹⁷⁾出土甕では甕ⅡB、甕ⅢDが出土している。阪田編年¹⁸⁾で小若江北式併行とする佐堂遺跡SD6014から甕ⅡA、甕ⅡBが、それより後出的とされるSD6003から甕ⅡB、甕ⅢC、甕ⅢDが出土している。こうしたことから河内においては、小若江北式以前の段階では甕ⅠA、甕ⅠB、甕ⅡA、甕ⅡCが主体をなし、小若江北式併行期では甕ⅡBを主体に甕ⅡA、甕ⅢC、甕ⅢDが、小若江北式以降では甕ⅢCが主体的な布留型甕とみてよいようである。

摂津では柳本編年¹⁹⁾がある。提示された資料でみると、布留I式とされる、穂積遺跡SK44井戸から甕ⅠA、甕ⅡCが、利倉西遺跡第3調査区第3層溝から甕ⅡA、甕ⅡB、甕ⅡC、甕ⅢDが一括出土している。II式小若江北併行期とする島田川遺跡資料では甕の実体が不明、III式とする北条遺跡資料では、内傾肥厚する甕ⅢDと口縁端部が丸く終るものが出土、須恵器と共に前段階のものとしている。

以上、大和・河内地方の資料を中心に、布留型甕の様相を僭越ではあるが北安江遺跡出土の布留系甕の形式分類をもとにみてきた。その結果を整理すると、甕ⅠA、甕ⅠBは布留型甕として定型しえてない布留傾向甕で、V様式型甕や庄内型甕と共に伴すると理解でき、甕ⅡAもこれに近い特徴をもち、小若江北式期直前まで残存する甕ⅡBは布留型甕では古い特徴をもつもので、小若江北式期では甕ⅢDとともに主体をなす。甕ⅡC、甕ⅡD、甕ⅢCは小若江北式期以前に出現しており、口縁端部形態の定型化以前に個別形態が著しい段階があったことを示すものと理解できる。これらは少量ではあるが小若北式期に残存する。甕ⅢDは内傾幅広肥厚傾向が顕著となり小若北式期以降の布留型甕の主体をなす。

(4) 北加賀での出土状況

南新保D遺跡²⁰⁾ 金沢市北西の沖積平野に位置する月影期を中心とする集落遺跡。布留系甕は、A区包含層から甕ⅢDが、D区T-102溝から甕ⅠA、甕ⅠBが、D区T-105溝から甕ⅡA、甕ⅡCが出土。甕ⅢDを除いていずれも月影II式土器と共に存するが、T-105溝は重複関係よりやや新相。

御経塚ツカダ遺跡²¹⁾ 野々市町北東の沖積平野に位置する月影期を中心とする集落遺跡。81-1号住から甕ⅠA、甕ⅡCが、81-6D土塙から甕ⅡAが、81-1T溝（南地区）から甕ⅡDが

出土。81-1号住は月影II式（新）土器を伴出。81-1T溝は（北地区）から月影II式土器が一括出土。

無量寺遺跡⁽²²⁾ 金沢市北東の沖積平野に位置。溝状遺構から甕I A、甕II Dが出土。月影II式およびその退化式を主体とする土器と伴出。また、小型器台、庄内系タタキ調整甕（7点）を伴出するが、山陰、東海、近江系土器の伴出はない。

無量寺B遺跡⁽²³⁾ 無量寺遺跡に隣接し同一遺跡となる可能性が大。月影期を主体とした沼状落込み遺構から甕I A、甕II A、甕II B、甕II Dが出土。庄内系甕を伴出。

南新保三枚田遺跡⁽²⁴⁾ 南新保D遺跡の北西に隣接。月影II式期を主体とする1号溝から甕I Aが出土。沼状遺構から甕I A、甕II A、甕II B、甕II C、甕II Dが出土。沼状遺構は月影II式期を主体とし、他に庄内系甕、山陰系甕を伴出。

下安原海岸遺跡⁽²⁵⁾ 金沢市北西の海岸に位置。第2次調査G区上層から甕I A、甕I B、甕II D、甕III C、甕III Dが出土。月影II式およびその退化型式を主体とし、他に山陰系甕、近江系甕を伴出する。

二口六丁遺跡⁽²⁶⁾ 金沢市北西郊の沖積平野に位置。大溝から甕I A、甕I B、甕II A、甕II B、甕II C、甕II D、甕III C、甕III Dと全種が多量に出土。量的には甕II A、甕II B、甕II C、甕III Dが多い。月影系甕は少なく、庄内系甕の出土が目立つ。他に山陰系甕・壺、近江系甕を伴う。小型精製土器としては、丸底壺、鉢、器台が小量出土。また、小溝Aから月影系甕とともに甕I B、甕II Dが、第3号ピットから甕I A、甕I B、甕II Cが出土。

古府クルビ遺跡⁽²⁷⁾ 金沢市北西郊伏見川西岸の微高地に位置。古府クルビ式の標式的土器群を抽出した遺跡である。大溝跡と推定される包含層から多量の布留系甕が出土。北安江遺跡で確認したすべての甕が存在する。中でも、甕II A、甕II B、甕II C、甕II Dなど口縁端部の肥厚が目立たない古式のものを主体とする。月影系甕は出土量の約10.4%と少なく、山陰系甕を中心に庄内系甕、東海系甕を伴出する。小型精製器種は丸底壺、鉢、器台があるが定型化したものではない。また、山陰系壺とともに、器面を飾った中型有段壺が多出することが特徴的である。

畠田・寺中遺跡⁽²⁸⁾ 金沢市北西の沖積平野に位置する方形周溝墓5基、土塙状遺構14基からなる遺跡。1号周溝墓から甕I A、甕II Cが、2号周溝墓から甕II C、甕II D、3号周溝墓から甕II D、4号周溝墓から甕I A、甕I B、甕II C、甕II Dが出土。山陰系甕・壺の伴出が目立ち、月影系土器は1・2号周溝墓に数点伴出するにすぎない。小型器台を除いて小型精製土器の伴出はみられない。

押野西遺跡⁽²⁹⁾ 金沢市南西郊外に位置。L-4土塙から甕I B、甕II A、甕II Cが出土。月影系土器は含まず庄内系タタキ調整甕を伴出。

法仏遺跡⁽³⁰⁾ 松任市南西に位置。大溝から甕II A、甕II B、甕II Cが月影系甕、山陰系甕・壺とともに出土。古府クルビ式の標式的土器群とされている。

田中B遺跡⁽³¹⁾ 金沢市北郊の沖積平野に位置。A・BトレンチおよびA拡張区では、大きく2層の包含層が存在し、下層とされる黒褐色土層から甕II B、甕II D、上層とされる灰黑色土層から甕III C、甕III Dが出土。下層から月影系土器が小量伴出、上層は初期須恵器直前までの資料を

含む。

高畠遺跡⁽³²⁾ 金沢市西郊に位置する土塙墓と推定される土塙群からなる遺跡で、玉造関係の資料を伴っている。多量の布留系土器が出土し、高畠式土器が設定された。1次4号土塙から甕II Dが、1次9号土塙から甕II B、甕II C、甕III C、甕III Dが、1次10号土塙から甕III C・甕III Dが、1次12号土塙から甕II Cが、2次1号土塙から甕II A、甕II D、甕III Dが、2次32号土塙から甕II C・甕III Dが出土。全体に山陰系甕・壺との共伴例が多く、1次4号土塙から月影系甕が、1次32号土塙から小型精製壺（平底）が、1次9・10号土塙から小型器台とともに畿内型高杯が出土している。また、1次10号土塙に石鉈が伴う可能性が強い。高畠式土器の標式とされるのは、1次9・10号土塙、2次32号土塙出土土器と考えられ、1次4・12号土塙はやや先行する可能性が強い。

以上、北加賀の報告書が刊行されている遺跡での布留系甕の出土状況をみた。その結果を整理する。甕I A、甕I Bは南新保D遺跡や御経塚ツカダ遺跡例などから月影II式期に少量伴うものと推定される。こうした事実は金沢市近岡ナカシマ遺跡溝上層⁽³³⁾でも確認される。つづく古府クルビ期にはほぼすべての形態の布留系甕が出揃うが、II類において肥厚度の小さいものが主体をなす。甕II B、甕III C、甕III Dは極めて少量である。また、遺構によってはその出土比に傾向差があり、伴出土器の様相差もみとめられることから、新・古相と2分されうる可能性が強い。またこの段階では、定型化した小型精製土器はみとめられなく、脚底部でラッパ状に開脚する畿内型の高杯もほとんどみられない。甕II B、甕III C、甕III Dは高畠遺跡土塙群では主体をなし、高畠式土器は、この種の甕の多出、小型精製土器の伴出、畿内型高杯の普遍化などの事実によって、古府クルビ式と区別される。こうした結果から、北加賀においても畿内とほぼ同一歩調でもって、在地土器から布留系土器への転換がはかられた可能性が強い。また、転換期にあっては、遺跡や個別遺構単位で、土器相が著しく偏る場合があり、その編年的他置づけは複雑である。こうした実体をふまえ、段階設定と他地域との併行関係を次に考えてみたい。

(5) 転換期土器の編年区分と他地域との併行関係

北加賀における畿内第V様式併行期から布留式併行期にいたる転換期土器の推移は、法仏I・II式・畿内第V様式後半、月影I・II式第一V様式亞式ないしは庄内式、古府クルビ式・高畠式・布留式古段階、の大きく3段階6小期に編年される⁽³⁴⁾。この編年案での段階区分の要点を整理し、他地域との併行関係の見通しについて若干述べ、まとめとしたい。

法仏I・II式期 日本海を介して山陰地方と濃密な関係を保ちつつ、北陸独自の地方色が強まる段階。法仏I式土器は、有段口縁甕・壺、器台やスタンプ加飾土器など山陰地方の該期土器（波来浜式・九重式⁽³⁵⁾、青木II式⁽³⁶⁾）と極めて近似し、姉妹関係にある土器群で、その類似土器の分布も日本海沿岸域を中心に広く分布している。また、法仏II式土器は、広義の「北陸型土器」として定着化の方向性を明確に志向するもので、次段階の月影式土器の祖型をなす土器群である。

月影I式期 法仏I・II式期での汎北陸型ともいべき齊一性が失なわれ、北陸内部の個別地域差がもっとも顕著化する段階。北加賀では法仏II式土器の直接的系譜下のもとで月影I式土器

が出現する。明確に山陰系土器と訣別した在地性の強い土器群で、遺跡によってはほとんど他地域からの流入土器やその影響を受けた土器を含まないところに大きな特色がある。また、塚崎遺跡⁽³⁷⁾や鉢伏ギョウダカ遺跡⁽³⁸⁾など、特殊な台地性集落や環濠などの防御機能をそなえた集落がこの期を中心に営まれるなど、社会構造そのものが変動的であり、かつ閉鎖的であったと思われる。他地域との併行関係を示す資料に乏しいが前後の関係から、畿内の都出編年⁽³⁹⁾ 北鳥池下層式～上田町I式、纏向編年I式～II式のある時期、山陰の鍵尾I式あるいは青木IV式、東海大參編年⁽⁴⁰⁾ の山中式～欠山式にかけてのある時期と併行するものと考えられる。畿内にあっては高地性集落がこの期に顕現化するという事象⁽⁴¹⁾や、東海の環濠集落がこの期に集中するという事象⁽⁴²⁾とも一致をみる。

月影II式期 月影II式土器に示されるように在地土器の定型化が極致に達する一方で、外来系土器の流入、在地土器の地域間の移動など、土器の動態が活発化する段階。すなわち、月影I式期の段階で顕現化した北陸内部の地域差が、地域集團の再編成過程の中でさらに明確化されると同時に、土器の移動などに示される地域間交流が活発になるが、在地土器そのものの変容はほとんどなく、逆に地域色を強固に主張するところに大きな特色がある。この期における独自の在地性を示すものとして、月影式特有の有段擬凹線文甕の一元的盛行、赤彩・加飾された有透結合タイプのいわいる装飾器台、小型台付装飾壺などの在地祭式土器の盛行がある。

また、集落遺跡の動態でみると、塚崎遺跡、額谷ドウシング遺跡⁽⁴³⁾ 西念・南新保遺跡などこの期で廃絶する遺跡と、逆にこの期を契機にして出現する御経塚ツカダ遺跡、南新保D遺跡、田中B遺跡など集落の興廢が大きく二つの動態に分けられる。また、月影I式期にみとめられた特殊な台地性集落の消滅、環濠の廃棄なども注目すべき特徴のひとつである。この期で廃絶する遺跡は塚崎遺跡などのように外来系土器をほとんど含まないことが多く、この期に開始される遺跡ときわだった傾向性の違いを示している。それが時期差に基因するものか、遺跡の性格に基因するものか、今後の検討課題として残る。いずれにしても、都出比呂志が「畿内第6様式の社会」⁽⁴⁴⁾として設定した社会構造の段階が月影II式期と想定しうる。

他地域との併行関係を示す外来系土器の流入も多く、また北陸系土器も、畿内をはじめ、遠く備後の神辺御領遺跡⁽⁴⁵⁾や北九州の三雲遺跡⁽⁴⁶⁾ 東国の千葉県大崎台遺跡⁽⁴⁷⁾や神門5号墳⁽⁴⁸⁾にまでその足跡を残している。こうした事実から、月影II式期は、畿内では都出編年上田町I式～II式期、纏向編年II式～III式（古）に、山陰では的場式・鍵尾II式あるいは青木V・VI式、秋里遺跡⁽⁵⁰⁾ 8～10区土器群（秋里I式）に、東海ではS字状口縁の伴出例から欠山式（新）⁽⁵¹⁾に併行すると考えられる。

古府クルビ式期 土器の地域色が急速に失なわれ、畿内系土器に同化してゆく過度期の段階。土器相としては、畿内・山陰・東海・近江系土器の影響が濃厚に看取され、その諸要素が複雑にからみあつた形で構成されるなど、遺跡単位にその組成は複雑で多様性に富む。このため、在地系土器を純粹に「型式」として、これらの土器相から抽出するのは困難である。中でも在地系土器の変容に大きな影響力を与えたのは、山陰系および布留系土器と思われ、その系譜下におかれる土器の出土比が最も多い。すなわち、畿内庄内系土器や近江・東海系土器が流入という形

をとるのに対し、布留系土器や山陰系土器は在地土器相をその根底から変節させるがのごとくに在地土器と取りかわっている。北陸を含む西日本において在地土器から布留系土器の転換にあたっては、山陰系土器が大きな役割をはたしている可能性が強く、各地域の転換期土器とともに山陰系土器が伴出する例が、畿内や北部九州でも比較的多く確認されていることは興味深い現象である⁵²⁾。古府クルビ期を定型化した布留型甕や小型精製土器群を主要な組成とする土器群（小若江式）の北加賀での定着化以前におくとするなら、前述した布留系甕の出土状況からこの期の土器相は新旧2相に分かれる可能性が強い。ただ、この期の土器相は個別遺跡や遺構によって様相差が大きく、その取扱いは慎重を要するが、古相にあっては、在地系土器の残存度が高く、新相においてはほぼ布留系、山陰系土器に限られてくることがその一応の目安となろう。

さて、他地域との併行関係であるが、畿内では西岩田遺跡Bトレンチ河川1・馬場川遺跡T地点、穂積遺跡SK44井戸など庄内式土器共伴期から坂田寺下層式、平城宮下層式の段階すなわち柳本編年⁵³⁾のI式期、纏向編年では3式新から4式期に、山陰では長瀬高浜I式期⁵⁴⁾、東海では元屋敷式期に対応するものと考える。

また、この期を契機としていわいる「古墳」が出現することも大きな特色である⁵⁵⁾。この期の古墳としては出土土器からみて加賀市小菅波4号墳⁵⁶⁾、宇気塚越1号墳⁵⁷⁾、大槻11号墳⁵⁸⁾、国分尼塚1号墳⁵⁹⁾などがあげられる。ただ、現在のところこの期にまで遡る石製腕飾類の製作遺跡が確認されておらず、前期古墳でも石製腕飾類を副葬しない古墳の段階と理解される。こうした意味でも、先にあげた前方後方墳を主体とした北陸の初期古墳の出現は畿内とそう前後しない時期であった可能性が極めて高いと考える。

高畠式期 前段階で顕現化した複雑な多様性が失なわれ、畿内布留系土器として定型化した段階。甕は布留系甕で占められ、定型化した小型丸底壺・鉢・小型器台などの小型精製土器や畿内型高杯が確実に器種構成の中に加わるなど、在地の自立性を示すものは土器組成の上では皆無である。このように、高畠式土器は齊一化した布留系土器主体の土器群であるところに大きな特色がありこの地方が畿内を中心とした政治圏に物身ともに面的に組込まれていったことを示している。それはまたこの地が数少ない玉製作地であったこととも無関係ではなく、石製腕飾類の生産がこの期を特徴づけるものとなっている。すなわち、石製腕飾類の工房址と考えられる加賀市片山津玉造遺跡⁶⁰⁾1・2・3・6号住居跡出土土器がこの期を遡るものではなく、この期の標式的土器群とした高畠遺跡9・10号土坑出土土器に玉造関係遺物が伴っている事実からも、畿内政権が石製

第6表 北加賀における甕形土器変遷表

	布留系						V 様式系	庄内系	山陰系	東海系	近江系	在地系	
月影	IA	IB	IIA	IIB	IIC	IID	III C	III D					
I													
II													
古 府 ク ル ビ													
高 畠													

腕飾類を必要とした段階、⁽⁶¹⁾それを副葬品としてもつ古墳の築造時期がほぼこの期とみてよいと考える。

布留系土器以外に他地域との併行関係を対比しうる資料にめぐまれないが、畿内では、上ノ井遺跡溝、藤原宮内裏外郭 S D912・同 S D914などの小若江北式期、山陰では小谷式、長瀬高浜II期、東海では石塚式期に併行するものと考えておきたい。

(6) おわりに

地域における転換期の土器相を考える上で、在地系土器と外来系土器はその共伴関係において常に問題となる。北安江遺跡でのC16溝・C17溝における土器出土状態は、溝という性格もあり意識的に観察したが、かなり混然としたものであった。こうした溝出土の土器は土器編年上全く使用不可であるのであろうか。このような疑問につきあたる中で、南久和氏の一連の論攷^{(62)・(63)}はこれらの問題をみごとに解消してくれるもので大いに勇気づけられた。いささか独断的ではあったが布留系甕の地域での展開をとおして、転換期社会の変革過程を追求した。北加賀での諸段階と他地域での併行関係も不完全で説明不足ではあるが提示した。諸先学の御批判・御叱正をいただければ幸いである。

なお、本稿は、先に発表した「北加賀における古墳出現期の土器について」の小稿の不十分さを少しでも補えることができたらという意図もあり、個別遺跡のまとめとしてはやや体裁の悪いものとなつたが、先の小稿と合わせて御叱諭いただきたい。

最後に、本稿を記すにあたって、田嶋明人、南久和、宮本哲郎、出越茂和、楠正勝の諸氏より格別の御教示を頂いたが、十分に生しきれなかつたことを心よりお詫びしたい。

註

- (1) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』第60巻第2号) 1974
- (2) 米田敏幸「第8章考察第1節古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会 1981
- (3) 米田文孝「弥生後期甕から布留型甕へ」(『ヒストリア』第97号) 1982
- (4) 註(1)文献と同じ
- (5) 関川尚功「V考察篇第1章纏向遺跡の古式土師器—纏向1～4式の設定」『纏向』橿原考古学研究所 1976
- (6) 藤井利章「第6章考察第5節発志院遺跡の布留式土器とその編年試案」『発志院遺跡』橿原考古学研究所 1980
- (7) 安達厚三「第48次調査第2次朝堂院東朝集殿地域」『奈良国立文化財研究所年報1969』
- (8) 註(5)文献と同じ
- (9) 奈良県立橿原考古学研究所編『院上遺跡』 1983
- (10) 註(6)文献と同じ
- (11) 財团法人大阪文化財センター『西岩田』 1983
- (12) 小山田宏一「第V章総括追記」文献(11)に同じ
- (13) 東大阪市教育委員会『馬場川遺跡発掘調査概要IV』 1976
- (14) 大阪府教育委員会『萱振遺跡発掘調査概要』 1983
- (15) 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』 1981
- (16) 註(2)文献と同じ
- (17) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』 1956
- (18) 阪田育巧「河内における布留式土器の一様相」『佐堂(その2-1)』大阪府教育委員会 1984
- (19) 柳本照男「布留式土器に関する一試考」(『ヒストリア』第101号) 1983
- (20) 金沢市教育委員会『金沢市南新保D遺跡』 1981

- (21) 野々市町教育委員会『御経塚ツカダ遺跡』 1984
- (22) 金沢市教育委員会『金沢市無量寺遺跡』 1984
- (23) 金沢市教育委員会『金沢市無量寺B遺跡』 1982
- (24) 金沢市教育委員会『金沢市南新保三枚田遺跡』 1984
- (25) 橋本澄夫「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」(『石川考古学研究会々誌』第18号) 1975
- (26) 金沢市教育委員会『金沢市二口六丁遺跡』 1983
- (27) 橋本澄夫・高橋 裕「金沢市古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会 1976
- (28) 金沢市教育委員会『金沢市畝田・寺中遺跡』 1984
- (29) 南 勉「金沢市押野西遺跡第2次発掘調査L-4土塁の概要」『金沢市二口町遺跡』金沢市教育委員会 1983
- (30) 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」(『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号) 1983
- (31) 橋本澄夫「金沢市田中B遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III』石川県教育委員会 1976
- (32) 金沢市教育委員会『金沢市高畠遺跡』 1975
- (33) 出越茂和氏の御教示による。
- (34) 註(36)文献に同じ
- (35) 東森市良「入門講座・弥生土器—山陰3」(『月刊考古学ジャーナル』No.192) 1981
- (36) 青木遺跡調査団『青木遺跡発掘調査報告書III』 1978
- (37) 石川県教育委員会『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』 1976
- (38) 石川県立埋蔵文化財センター『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』 1980
- (39) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号) 1974
- (40) 大參義一「弥生式土器から土師器へ」(『名古屋大学文学部研究論集』XLVII) 1968
- (41) 註(38)文献に同じ
- (42) 三渡俊一郎「名古屋市見晴台遺跡と附近の弥生時代濠状遺構」(『古代人』40号) 1982
- (43) 金沢市教育委員会『金沢市額谷ドウシンダ遺跡・金沢市無量寺B遺跡II』 1984
- (44) 金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡』 1983
- (45) 註(38)文献に同じ
- (46) 広島県教育委員会『神辺御領遺跡』 1981 E地点S D08遺構出土土器
- (47) 福岡県教育委員会『三雲遺跡III』 1982 イフ地区大溝上層出土土器
- (48) 八王子市郷土資料館『三～四世紀の東国』 1983
- (49) 田中新史「出現期古墳の理解と展望」(『古代』第77号) 1984
- (50) 鳥取市教育委員会『秋里遺跡I』 1976
- (51) 古墳時代土器研究会『古墳時代土器の研究』 1984
- (52) 「遺跡単位での在地土器と流入土器」『埋蔵文化財研究会第15回研究集会資料』 1984
- (53) 註(19) 文献に同じ
- (54) 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書III』 1981
- (55) 石川県内では現在のところ古府クルビ式以前に遡る前方後方(円)形の墳丘をもつ墓の発見例はない。ただし、盛土をもつ方形周溝墓あるいは台状墓の類、すなわち「墳丘墓」に類する大型区画墓は月影式期およびそれ以前に存在することは確認されている。しかし古府クルビ式期を契機に、突出部を設ける「前方後方形」を呈する区画墓が出現することは墳墓構造上でも大きな画期であり、北陸の古墳時代はこの期をもって開始されると考えたい。こうした「古墳」と「墳丘墓」の違いをみる一例として、墳墓供獻土器の相違があげられる。この手の「古墳」から出土する土器は、ほぼ壺と高杯に限定される傾向があり、中でもクシ描き文で加飾した中型有段壺や、椀状をなす杯部をもつ小型高杯など外来系と考えられる土器を供獻している例が多いことが特徴的である。これに対してそれ以前の「墳丘墓」は、「在地型祭式土器」を主体に、甕など日常品の供獻が多いことを特徴としている。こうしたことから、北陸にあっては、墓制の変革と土器祭式の変化が一体的なものであった可能性が高い。「前方後方形」という墳形の採用にあたっては、なんらかの地域の枠を超えるようなきわめて政治的な契機が存在したことは疑いえない。

- (56) 小菅波遺跡発掘調査団『小菅波遺跡発掘調査ニュース』 1978 報告書末刊。
- (57) 石川県教育委員会『河北郡宇ノ氣町宇ノ氣塚越遺跡』 1978
- (58) 石川考古学研究会「鳥屋・高階古墳群分布調査報告」(『石川考古学研究会々誌』第20号) 1977
- (59) 和田晴吾「石川県国分尼塚1・2号墳」(『月刊文化財』254号) 1984
- (60) 加賀市教育委員会『加賀市片山津玉造遺跡の研究』 1963
- (61) 初期畿内政権が、政治的連合性が強い地域同盟国家から、政治的統一性の強い国家へと性格を変節する段階、すなわち畿内政権による地方首長層への石製腕飾類の一元的配布がそれを物語るものと考える。いわゆる定型的とされる「畿内型古墳」の県下での造営はこの時点であったと考える。
- (62) 南 久和「金沢市古府クルビ遺跡出土土器に認められる代謝現象について」『金沢市畠田・寺中遺跡』金沢市教育委員会 1984
- (63) 南 久和「相対的編年 の方法論に関する試論」『南久和著作集第1集』 1985